

この箇所は神に関する証しです。私たちは「主イエスの父なる神様」と祈ります。人による証言は、主の権威の基礎ではないと言っているのです。洗礼者ヨハネとの関係でこのことが語られます。けれども人が信じていることは、ないがしろにされるものではなく、教会は信ずる人達により、信仰を得たのです。マルコ一章22節で「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった」と伝えます。そのうえで主は「人間による(人についての)証しは受けない」(34節)と語られます。今や人々は、ヨハネの証言の光に導かれ、この方に触れ、光に出会うのです。

父の業について、主イエスは次に語られます。御父の権威と力によって主が成し遂げられたことです(36節)。業そのものが、教え以上に、主において成し遂げられたことによって、信仰は生み出されるものなのです。権威あるあかしは、父の証言なのです。しかし「あなたたちは、まだ父のみ声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない」(37節)とある通り、御言葉を聴く機会が聖書において沢山あったのに、その言葉が心に留まらなかったために信じるに至らず、また反対に御子を知るものは父を知るのです(ヨハネ一四・9に「わたしたちに御父をお示してください」と言うのか」とあります)。主を聖書が証していなければ、旧約聖書は無用になってしまいます。「聖書は私を証するのに、命を得るために、私のもとに来ようとはしない」(40節)と説明されています。

裁きの主ではなく救いの主は、誉

れを受けるためではなく、聞いてくれる者たちの心に「あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている」(42節)と愛する者へ警告します。

そして、神からのものではない誉れについて続けます。毎週私たちがこのことを祈ります。「力はなんじのもの」と。もし、御名以外が崇められ、力が主のものでなかったら、一部分でも主によらないものであったら試みとなり、激しい対立となるのです。

## ヨハネによる福音書シリーズ

### ⑫御子の証し ヨハネ5:31~47

清水草薙教会牧師 村上定幸

44節に「互いに相手からの誉れは受けるのに」という言葉に帰って思い返してみましよう。栄誉や地位のような優越感を好み、劣等感に対しては脅えるのです。そして信仰があると思わなかったにせよ、恵みを得ていないのです。代わりに苦痛を得ているのです。

もう一度44節の「相手からの誉れは受けるのに」という言葉に帰って思い返してみましよう。栄誉や地位のような優越感を好み、劣等感に対しては脅えるのです。そして信仰があると思わなかったにせよ、恵みを得ていないのです。代わりに苦痛を得ているのです。

して「相手からの誉れ」を真剣に求めるようです。そのうえ、教会は神の救いを見つかります」とあります。どうしようもないように感じられることから救われる教会に与えられた方法をもっているのです。聖餐式を習慣にしてしまっていないでしょうか。さらにウエスリは続けて「聖書を調べなさい、なぜなら、私について証言しているからである」と今回の箇所を引用します。軽視することも誤用することもなく、ただ聖霊の力と御子による救いを追い求め、知っている教会の業に力を注ぎましよう。

次に主イエスは、モーセに触れられます。45節に「父に訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ」とあります。モーセという言葉には特別の意味がありました。律法を与えたのがモーセ

であり、この律法において主を告発しようとしていました。しかし主の教えは、「律法を成就する」ものでありました。旧約聖書から一か所だけ思い出しましょう。申命記一八章18節には「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう」とあります。なのに、この人々がより頼むのは、律法の繩目によって守られているかのような、救いには無関係な力と誉れだったという訳です。